

## THIS IS JAPAN IN TOKYO 永遠の日本美術の明宝

東京富士美術館（東京・八王子） 2020.09.01～11.29



当館が所蔵する日本美術作品は、平安時代から近現代に至る多様な分野にわたるが、本展では千年の歴史の中で育まれてきた日本文化の豊穡な芸術世界のエッセンスをコンパクトにわかりやすく楽しむことができる。

つまり、「キモカワ」「サムライ」「デザイン」「黄金」「四季」「富士山」など日本美術を特色できるキーワードを通し、“永遠の日

本美術の明宝”を俯瞰的に横断している展覧会である。

葛飾北斎《富嶽三十六景 山下白雨（さんかはくう）》 1831（天保2）年



江戸時代末期「一条の稲妻、裾野は夕立」の発想に驚かされる作品で、富士に大きな稲妻が走る様子は、概風快晴が「赤富士」と呼ばれるのに対し「黒富士」と呼ばれている。夏の夕立を漢語風にいえば「白雨」で、漆黒に摺りつぶされた裾野は、空間の底知れない深さを表現し、背後の白い雲は縁起のよい瑞雲のように文様化している

のは霊峰のイメージを高めるものとされる。

歌川国芳《みかけハコハるがとんだいい人だ》江戸時代 大判錦絵 台紙貼



画伯の代表作の一つで、戯画のうち「寄せ絵」と呼ばれるもので、人間の目、鼻、口から眉毛などにいたるまで、そして着物の中の身体つきについても、さまざまな姿の人間を組み合わせるというユニークな趣向に富んだ作品である。

みかけは怖い妖怪ではなく“人が集まって人の顔形になる寄せ絵の発想”であるが、裸の男性の背中からお尻を使って鼻を作る大胆さなど、人体の組み合わせやポーズが独創的でありまことに面白い。

肌の部分は裸体によって表現され、着物や髪は着物を着た人物によっているが、随所に人体以外のモチーフをうまく組み入れている独特な絵画である。